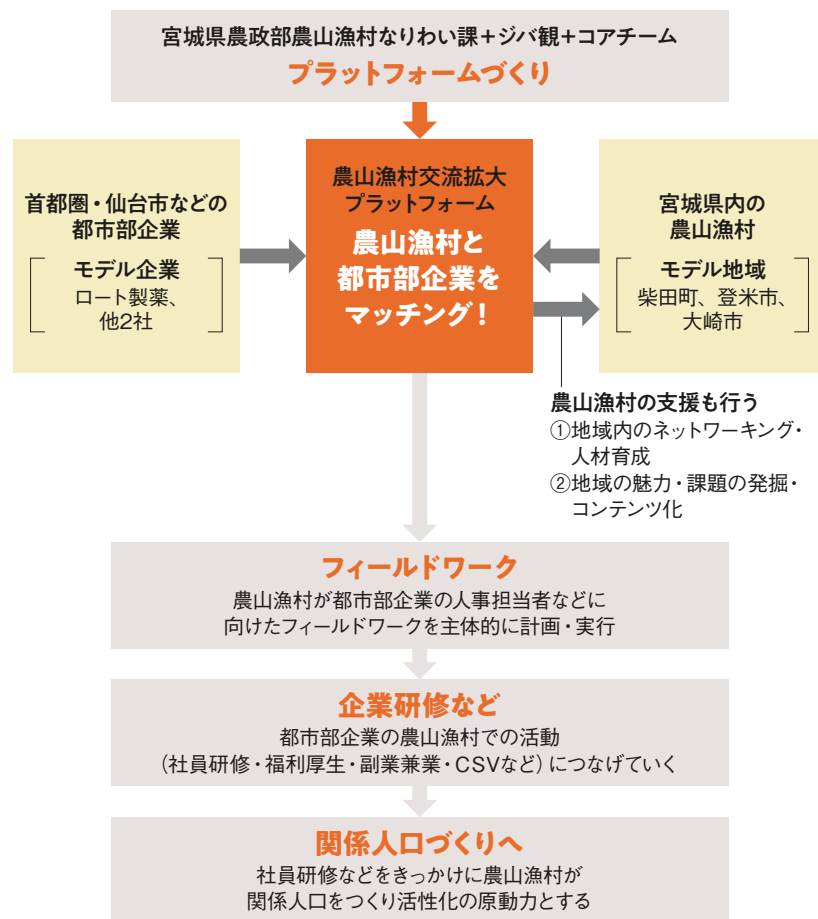


図1 農山漁村交流拡大プラットフォームの全体像



それが取り組みの原動力となっている。
多様なメンバーの対話が
良い活動を実現する

ジバ観は、基本的に次のプロセスで観光ジバづくりを進めてきた。
①地域に「共創チーム」をつくる
②共創チームで「話し合う」
③共創プロセスに従って、「まずやってみる」
今回もこのプロセスを進めている。
具体的には次の通りだ。

①プラットフォームの全体企画とコアチームづくり
最初に、宮城県農政部メンバーとジバ観で全体企画を練った後、プラットフォームをつくり上げるためのコアチームを結成した。
コアチームには、宮城県の農山漁村などで活動する事業者、地域おこし協力隊、そして都市部企業社員など、6名の多様なメンバーに参画していただいた。
ジバ観では、こうして共創チーム

「ジバ観」とは、イキイキした観光地域づくり（観光ジバづくり）の中心核となって、自ら主体的に推進しつづける「地域愛でつながる協働チーム」を地域内に立ち上げる取り組みだ。「とーりまかし」52号に事例として

て「岐阜県白川村魅力ある観光地域づくり推進事業」を紹介した。
ジバ観は、その後も各地で協働チームを創ってきたが、2019年から宮城県農政部農山漁村なりわい課とともに始めたのが、「農山漁村交流拡大プラットフォーム」づくりだ。観光ジバづくりのノウハウを応用して農山漁村の関係人口を生み出し、



自ら持続可能な農山漁村を創るための実証実験を開始！

宮城県農政部 × ジバ観 農山漁村関係人口 創出プロジェクト

2019年、ジバ観（観光ジバづくりのための協働チーム育成研究）が宮城県農政部農山漁村なりわい課と「農山漁村交流拡大プラットフォーム」づくりを始めた。観光ジバづくりのノウハウを応用して、農山漁村の関係人口を創出し、自ら持続可能な農山漁村を創っていく新たな実証実験プロジェクトだ。そのチャレンジの内容と参加者の声を紹介する。

だし、沿岸部地域は東日本大震災復興予算や域外からの多様な業種・人が入っており、活動が活発化しているため、特に内陸部の農山村を重視しと首都圏・仙台市などの都市部企業を適切にマッチングし、農山漁村での人事担当者向けフィールドワーク、ひいては農山漁村での企業研修などにつなげることだ。

企業研修が何度も行われれば、やがて農山漁村に「関係人口」が生まれるだろう。それを増やすことで、「自ら持続可能な農山漁村」を県内に一つでも多く生み出す。それがこのプラットフォームの目的である。

それを実現するために、プラットフォームはマッチングだけでなく、農山漁村のネットワーク・課題の発掘やコンテンツ化も支援する予定だ。プラットフォームを立ち上げる背景には、農山漁村の急速な人口減少がある。離農者と耕作放棄地が増え、すでに里山や景観の保全が難しくなりつつある地域が多い。放っておけば、早晚消滅する農山漁村が出る。

農政部には、そうなる前に農山漁村と都市部企業人材の交流を深め、農山漁村の「関係人口」を増やして農山漁村の課題発見・解決に協力してもらいたいという想いがあった。

に多様なコアメンバーを集めることを重視している。なぜなら、「群盲象を撫でる」という考え方がベースにあるからだ（右図像）。「全体像を一人で捉えることはできない。全員が声を出す（群盲が象を撫でる）ことで全体像が現れる」という考えである。多様なメンバーが対話してはじめて、活動や周辺環境の全体を把握でき、バランスの良い活動を実現できると考えているのだ。

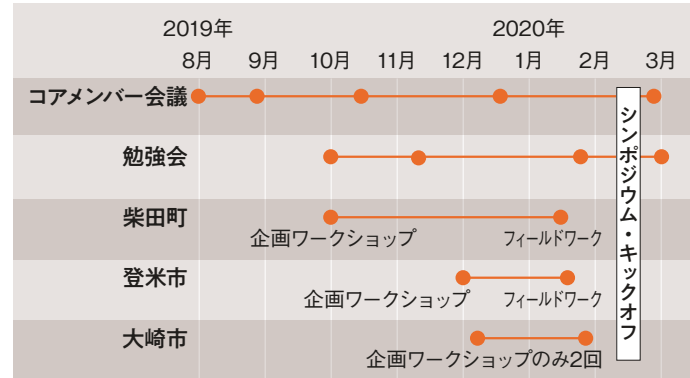
②コアメンバー会議と勉強会
コアチームを作った後、2019年8月〜2020年3月にわたって5回のコアメンバー会議と4回の勉強会を実施した（図2）。

コアメンバー会議には、コアメンバーと農政部メンバーが参加し、ジバ観がファシリテーターとなって、



大きな象の全体（全体像）を一人で捉えることはできない。誰の意見もある面で正しいが、正しく把握できているのは全体の一部に過ぎない。そのため、全員が声を出す（群盲が象を撫でる）ことで、はじめて全体像が現れる。
※英一蝶（1652 - 1724）による『衆瞽象を撫ず』図

図2 実証実験プロジェクトのスケジュール



全員でプラットフォームを形にしていた。その際、共創プロセスの「5要素」（図3）について話し合うことを重視した。なぜなら、この5要素を全員で決めていくことが、プラットフォームを具体化し、実現する上で有効だからだ。

また、勉強会には別途講師を呼び、まちづくりの先進地域・島根県海士町の事例や、都市部企業のニーズなどを学んだ。勉強会にはコアメンバー周辺の関係者などにも参加してもらい、学びの輪を広げていった。

コアメンバー・フィールドワーク実施者の声

前述の嶋崎さんのほか、都市部企業の代表者としてコアチームに参画していただいた阿部さん、柴田町里山保全フィールドワークで活躍していただいた地元農家・加藤さんの声を紹介する。



柴田町 農家
加藤嘉昭さん

都会の人たちと 交流するのは 私たちの 大きな楽しみ

私は柴田町槻木地区の農山村集落で生まれ育ち、今まで暮らしてきました。町役場に勤めた後に農家となり、並行して地域起こしに取り組んでいます。仲間たちと一緒に、農家レストランや直売所を作ったり、ハイキングコースを整備したりしてきました。それもこれも、周辺の住宅街や仙台市に住む皆さんに、槻木を知っていただきたいからです。今なら、直売所にはタケノコや山菜が並んでおり、あちこちから買いに来てくださいます。こうしたことをきっかけに、槻木に興味を持っていただけたらと思っています。

ですから、今回のプラットフォームには期待しています。私たちにとって、外の方々との交流は大きな楽しみなのです。

私の住む集落には信号もお店がありません。道路や用水路の草刈りは、集落の共同作業です。太陽が昇ったら起き、暗くなったら眠ります。口ベタだけれど、魅力的な人がたくさんいます。農業は誰にも気を使うことがなく、年をとっても続けられる仕事です。ここには都会とは違う生活があり、異なる人々が住んでいます。都会の皆さんにとって、きっと面白いところだと思います。多くの方と触れ合えたら嬉しいです。



一般社団法人
かかしの一本足 代表理事
嶋崎康二さん

住民たちが 自ら維持する 農山漁村づくりを 後押ししたい

私たちは2017年に、柴田町槻木地区で古民家宿「柚子のあぜ道 雨乞のかえる」を始めました。同時に、この宿を中心としたまちづくり事業にも携わってきました。地元の皆さんに恩返しをしたかったからです。都市部から来る宿泊客の方々は、宿から見える山や田畑、あぜ道の風景が素晴らしいと口々におっしゃってくださいますが、山も田畑もあぜ道も、整備しているのは実はすべて地元の皆さんです。つまり、私たちは地元の皆さんに稼がせていただいているのです。地域の仕事をするのは当然だと思っています。

これから長く生き残るのは、「住民たちが自ら維持する農山漁村」だけでしょう。柴田町がそうなるには、今から頑張っ地域を変えなくてはなりません。私はその後押しをしたい。今回の取り組みも、そうしたまちづくりの一環と捉えています。

柴田町の農家の皆さんは、お金のためにも休日のためにも働いていません。都市部の方々は、その生き方から発見することがたくさんあると思います。反対に、地域の皆さんも都市部の方から学ぶことが多くあるはずです。このプラットフォームには、さまざまな意味で地域を変え可能性があると感じています。



都市部企業
社員
阿部 真さん

農山漁村での研修は 都会の住人が 人生を見つめ直す 時間になる

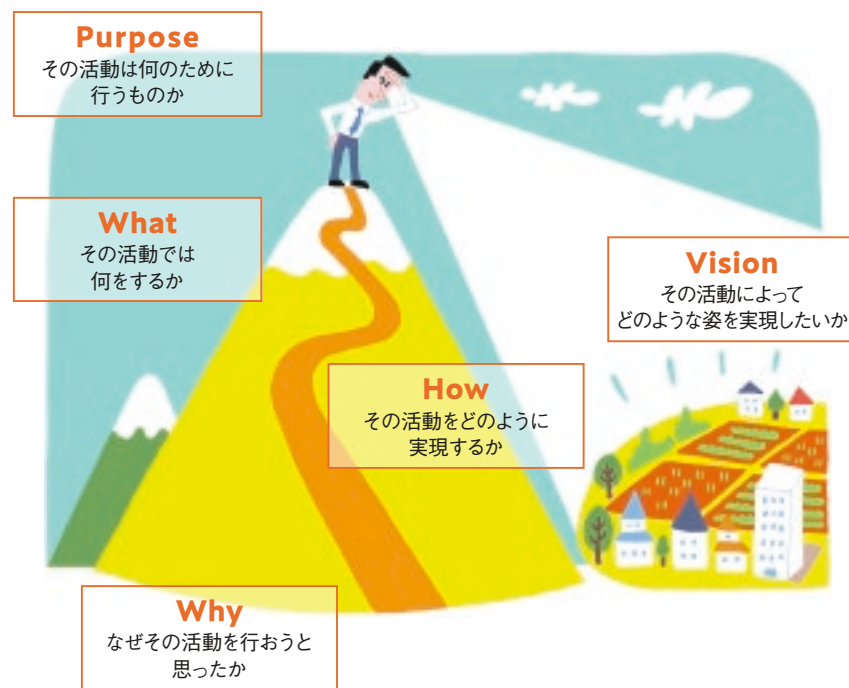
私はふだん都市部のある企業で働いており、そこで数年震災復興支援に関わった縁で今回のコアチームに個人として参画しました。コアチーム内では、都市部企業との連携を担当しています。

私が訪問した限りでは、マネジメント研修などを農山漁村で行うことを選択肢の一つとして検討する企業がいくつもあり、手応えを感じています。たとえば、「各地域に根ざした商品提案や売場設計をするため、各地域の暮らしを社員に詳しく調べてほしい」という理由から、社員を農山漁村研修に送ることを検討する小売業の会社がありました。

農山漁村での研修は、都会の住人が人生を見つめ直し、今後どう生きるかを考える時間になることは間違いありません。一例を挙げると、農業は工業と違い、決まった時期に決まった量の作物を作ることができません。メーカーの方なら、その農業の現場に接するだけでもいろいろと思うことがあるはず。私自身、復興支援で地域の皆さんと触れ合うことで、新たな価値観を得ることができました。

おそらく今後、研修や福利厚生などで農山漁村を活用する企業が増えるでしょう。その手助けをしたいと思います。

図3 共創プロセスの5要素



事例

柴田町里山保全フィールドワーク



フィールドワークの拠点となった古民家宿「柚子のあぜ道 雨乞のかえる」



フィールドワークを企画・準備するワークショップの様子



実際のフィールドワークの様子（竹林視察）

試験的に行ったフィールドワーク事例として、柴田町槻木地区の里山保全フィールドワークを紹介する。

柴田町は仙台市から自動車で40分ほどのところにある人口4万人弱のまちだ。町内には、比較的住宅が多い船岡地区と農山村中心の槻木地区がある。船岡地区には観光名所として一目千本桜があるが、桜の季節以外は基本的に静かである。

フィールドワークは、コアメンバーの1人・嶋崎康二さんが槻木地区で営む古民家宿「柚子のあぜ道 雨乞のかえる」を拠点にして、1泊2日で行った。日中は槻木地区の里山や森林を巡って暮らしと現状を知ってもらい、夜は地元食材や地酒を囲んで、住民との交流を深めてもらうプログラムだ。

今回は、ロート製薬人事総務部の蔵方佑介さんに参加いただいたが、蔵方さんには「都市で暮らし働いていると忘れがちな人間らしさを味わうことができた。私のように都会で生まれ育った者は、みな私と同じように、第二の故郷に訪れたような感覚になるのでは。今後、福利厚生の一環として柴田町訪問を社員に勧めていきたい」という感想をいただいた。

③モデル地域での試験的フィールドワーク
プラットフォームが農山漁村と都市部企業をマッチングした後は、農山漁村が主体となり、企業の人事担当者などに向けて「フィールドワーク」を実施し、人事担当者や地域の人の関係を深めながら、企業研修などの実現につなげていく流れになる。今回は実証実験のため、「モデル地域（柴田町・登米市・大崎市）」と「モ



都市部企業・企業人材視察（勉強会）の様子

デル企業（ロート製薬ほか2社）」をあらかじめ選定し、フィールドワークを試験的に実施した。ジバ観は、

地域の人たちとフィールドワークを企画するワークショップと、フィールドワークの本番をサポートした。④シンポジウム・キックオフ
プロジェクトの締めくくりとして、2020年2月に「農山漁村交流拡大シンポジウム」と、プラットフォーム立ち上げの「キックオフミーティング」を同時開催した。ジバ観はこのプログラムの企画と実施のサポートも行った。



柴田町槻木地区の風景

想いを持って自走する事業者・住民・行政を宮城県中に増やしたい

今回の「農山漁村交流拡大プラットフォーム」の仕掛け人である
宮城県 農政部 農山漁村なりわい課の小野寺淳さんに、
始めた経緯やターニングポイント、今後の展望などを伺った。

想いを持つ方々が交流し
学びあう場を用意したかった

農山漁村交流拡大プラットフォームを立ち上げようと考えたそもそものきっかけは、農山漁村を盛り上げたいという想いを持つ人々の「出会いと交流の場」「人材育成の場」を用意したかったからです。

私は2018年から農村交流担当として、県内の農山漁村、特に内陸部の農山村を今後どうしたら維持していけるかを考えてきました。その有力な手段の1つが、農山漁村の暮らしを体験するプログラムや滞在して楽しめる場を用意し、都会や海外の方などを呼び込んで地域を活性化させる「グリーン・ツーリズム」を通じた受け入れ体制づくりでした。

ただ、それは県が主導することではありません。各農山漁村の事業者・住民・行政に自分たちで形にしてもらう必要があります。県ができるの

は、想いを持って自走する事業者・住民・行政を増やすために、彼らが出会い、交流し、学びあう場を用意することでした。それがプラットフォームの大きな役割の1つです。実は2019年3月に、プラットフォームを検討する会議を開いたのですが、その打ち上げの席で初対面の2人が早速、新ビジネスの構想を話し始めるのを目の当たりにしました。私はこの光景を見て、やはり出会い・交流・学びあいの場が必要だと確信したのです。

幸いなことに、課内に私の考えを理解してくれる上司や同僚がおり、話を前に進めることができました。提案型人札を経て、ジバ観とタッグを組んでプラットフォームの立ち上げを目指すことに決めました。

私はこのプラットフォームでリーダー育成をするつもりはありません。特定の人物を育てるのではなく、皆で学び合うことで「地域人材の底上

げ」をしたいのです。想いを持って自走する事業者・住民・行政を一人でも多くつくりたいのです。それが、自ら持続可能な農山漁村を増やす一番の近道だと考えています。

マッチングによって収益を得る仕組みが重要だった

その後2019年8月から、コアチームの皆さんに主体となっていただき、現在のプラットフォームの仕組みをつくり上げていただきました。その際、大きなポイントだったのが「プラットフォームのマネタイズ」でした。私たち農政部としては、プラットフォーム自体が十分な収益を上げることで自律的に存続できる存在にしたい、という想いがありました。

なぜなら、公的資金に依存した運営をすると、公的資金が尽きたら終わってしまうからです。プラット

フォームを長く続くものにするには、自ら稼げるプラットフォームをつくる必要があったのです。

そこで皆さんから出てきたのが、「都市部企業と農山漁村のマッチング」によって収益を得るビジネスモデルのアイデアでした。正直に言うくと、会議の最中、うまくいかないかとも思った時期もありましたが、このアイデアが出たことで、全員が同じ方向を向けたと感じています。

ワークシヨップが
地域人材の底上げにつながる

プラットフォームの形が見えたところで、次に柴田町と登米市でフィールドワークを実施しました。

今後の展開

他の都道府県でも同様の取り組みをしてみたい

宮城県での「農山漁村交流拡大プラットフォーム」づくりは、2020年度も引き続き行っていく予定だ。2020年度は、プラットフォーム

を本格的に軌道に乗せていくことを目指している。参加する農山漁村、参加企業を増やし、成功事例のパターンを増やしたいと考えている。

それがうまくいけば、他の都道府県で同様のプラットフォームづくりを進めることも構想している。その結果、最終的に日本中で農山漁村と都市部人材の交流が盛んになり、農山漁村と都市を行き来するビジネスパーソンの姿が当たり前になることを、ジバ観は一つの目標としている。それから、観光や農山漁村以外にジバ観の方法論を適用するチャレンジも進めていきたいと思っている。

たとえば、地域福祉や地域防災のあり方を考えるコアチームを立ち上げ、地域全員で福祉や防災に取り組むプロジェクトに貢献することもできるのではないかと考えている。ユニバーサルツーリズム（福祉ツーリズム）や防災ツーリズムなどで都市部人材と交流する道もあるだろう。地域に共創チームをつくり、チームで話し合って、まずやってみるという方法は、おそらくまちづくりのさまざまなシーンに応用することができる。そうしたジバ観の可能性をさらに押し広げていくことも考えているのだ。

考察

先が見えない時代に 必要な力とは？

インターネットや物流の発達により人・モノ・情報の世界的な流通が大きく加速した現代では、新型コロナウイルスの影響はグローバルな経済、政治などから一人ひとりの仕事のあり方、家庭での過ごし方までさまざまに広がっている。わずか1年前にこれほど大きく世界が変化することを誰が予測しえただろうか。

起きた出来事に適切に対応していくことは大切だが、そればかりでは激変する環境に振り回され続け、明日が見えない不安の中で被害者の感覚が強まっていく。目の前の課題対応に追われ続けると「なぜ、何のためにやっているのか?」「どんな世界を実現したいのか?」という問いが脇に置かれがちになり、ひたすらタスク処理に忙殺されたり、意味が感じられずに次第に手足が止まったりして、本当の成果を結実させることはできない。

厳しい状況だからこそ、私たち一人ひとりが、どう生きていきたいのかという思いを寄せ合い、暮らす地域をどうしていきたいのか、ありたい姿を共有・共創しながら取り組みを進めていくことが重要だ。先が見えない世界に受け身であり続けるよりも、見えないからこそ明確な意思を持って作っていくのだ。未来は予測するだけでなく、自ら作ることができる。

今、私たちは、本当に大事なことは何かを問われている。人と人が、互いを尊重し助け合う関わり、自然環境や動植物と共生する暮らしか、誰もが安心して心豊かに生きることができる社会。そんな思いや願いに聴き耳をたて、私たちが生きていることや地域が存在することの意味、価値をもう一段深く問い直したい。あなたが生まれてきてよかったと思える生き方や人との関わり方、地域の未来とはどんな姿だろうか。

我々は人の「想像力」と「創造力」を本気で信じている。自分たちの未来を自分たちの手で思い描きつくる、誰もがその主人公として生きていく、そんな社会を日本のさまざまなところで実現したい。



ジバ観 ファシリテーター
平澤 勉、荒川崇志、
長友まさ美

地域の人たちが主体となる対話を促進し、未来にむけたアクション創出を伴走するプロファシリテーター集団。2016年より全国各地にて“地場”の力で地域に人を惹きつける“磁場”を生み出す「ジバ観」を実施。